

表 1 冠動脈瘤（拡張）の早期消失例の比較

| Aneurysm |      |     |       |         |          |                 |           |           |       |                      |
|----------|------|-----|-------|---------|----------|-----------------|-----------|-----------|-------|----------------------|
| Case     | Year | Sex | Score | Type    | Location | Days from onset |           |           | ECG   | Others               |
|          |      |     |       |         |          | First found     | Max. size | Disappear |       |                      |
| 1. S. K  | 11m  | M   | 5     | Spindle | LCA      | 11              | 20        | 31        | IRBBB | —                    |
|          |      |     |       |         | RCA      | 11              | 20        | 40        |       |                      |
| 2. O. M  | 6m   | M   | 4     | Spindle | LCA      | 7               | 14        | 35        | IRBBB | —                    |
| 3. M. K  | 7y4m | M   | 5     | Spindle | LCA      | 13              | 20        | 27        | —     | —                    |
|          |      |     |       |         | RCA      | 13              | 20        | 27        |       |                      |
| 4. I. H  | 3y   | M   | 6     | Spindle | LCA      | 20              | 20        | —         | —     | Pericardial effusion |
|          |      |     |       |         | RCA      | 20              | 20        | 36        |       |                      |

Score: Asai's Scoring System

し一方、RCA の拡張は完全に消失した例である。4例の重症度は、浅井・草川のスコア4～6点で軽症から中等症に属する。尚このような早期消失例と臨床症状及び一般検査所見との間には、特に有意の関係は見出せなかった。

冠動脈の拡張については、拡張の型は全例紡錘型であった。最初に発見出来た病日は、第7～第20病日、平均第13.5病日。最大の拡張を示した病日は、第14～第20病日、平均第19.1病日。また早期の拡張消失病日は、第27～第40病日、平均第32.7病日であった。尚症例1では、

最初にエコー輝度の上昇がみられ、症例4では、心膜液貯留を合併していた。

## 〔考 案〕

心エコー図断層法を用いて経過を追跡した川崎病患者において、冠動脈拡張の早期消失例を4例経験した。出現頻度も4:13と比較的高頻度と思われる。これらの症例は、他の川崎病患者と較べて、臨床症状及び一般検査所見の上で特に差はないように思われた。今後このような症例が如何なる変遷をたどるか、慎重に経過を観て行く必要があると思われる。

## 断層心エコー法による冠動脈狭窄性病変の診断

久留米大学小児科 加 藤 裕 久  
一ノ瀬 英 世  
松 永 伸 二

最近断層心エコー法によって冠動脈瘤病変を高率に診断できるようになったが、川崎病心後遺症として問題となる冠動脈の狭窄性病変の断層心エコー診断はまだ十分とはいえない。このため私どもは冠動脈の狭窄性病変を断層心エコー法でどの程度診断できるかを検討してみた。

対象は断層心エコー検査を受けた川崎病患児で、冠動脈造影検査の結果冠動脈狭窄所見の得られた15名を対象とした。また、3ヶ月から2才までの正常児30名を正常コントロールとした。

## 〔方 法〕

断層心エコー装置は東芝製 Model SSL-53M を用い、探触子は 5MHz の linear scanner を用いた。患児を仰臥位あるいは軽度左側臥位とし、大動脈の短軸断層面を基準面として左冠動脈主幹部を確認した後、探触子を反時計方向に回転していくと右冠動脈をみる事ができた。

## 〔結 果〕

選択的冠動脈造影検査で冠動脈の狭窄性病変がみられ

たのは15例で、このうち断層心エコー検査で狭窄の診断ができたのは11例(73.3%)であった。このうち2例に冠動脈瘤内血栓を認めることができた。false negative となったものは、狭窄の程度が局所的で50%以下のもの、動脈瘤後に狭窄が存在するもの、末梢に狭窄が存在したものであった。正常コントロール中狭窄を疑わせたものは30例中2例(6.6%)であった。

#### 〔考察〕

冠動脈の狭窄性病変を断層心エコー法で診断した報告は成人の動脈硬化病変の症例以外みられず、小児での報告は私どもが最初と思われる。冠動脈の狭窄病変を診断する場合 false positive があることは十分考えられる。特に私どもは3ヶ月の乳児2例に内腔が完全に分離できずに狭窄を考えさせたが、このように乳児例の狭窄病変

の診断には注意が必要と思われる。この他、動脈瘤病変をもった冠動脈は蛇行しやすくこれをエコー検査する場合ビームの方向によっては狭窄所見がでてくる可能性もある。false negative としては、狭窄の程度が軽い場合、特にそれが局所的な狭窄の場合には現在の断層診断には困難がある。また、動脈瘤後に狭窄が存在するような時にも動脈瘤によって狭窄が mask され易いし、末梢に狭窄があるような例もエコー診断は難しい。しかし私どもがおこなった5MHzのlinear scannerによる狭窄病変の診断は73.3%と高率であった。このことから、高周波数のトランスデューサは解像力の点でもすぐれており、川崎病心後遺症として問題となる狭窄や血栓の診断に有用と考えられ、今後は非侵襲的におこなえる重要な検査となると思われる。

## 川崎病罹患児の左心室壁異常運動後遺症に関する研究

|           |   |   |    |   |
|-----------|---|---|----|---|
| 東京女子医大小児科 | 草 | 川 | 三  | 治 |
|           | 多 | 田 | 羅  | 勝 |
|           | 浅 | 井 | 利  | 夫 |
|           | 松 | 井 |    | 光 |
|           | 李 |   | 慶  | 英 |
|           | 田 | 原 | 佳  | 子 |
|           | 伊 | 藤 | けい | 子 |

#### 〔目的〕

川崎病の心臓後遺症としては、冠動脈瘤を始めとした種々の冠動脈後遺症があることは周知のことである。ところが、冠動脈造影と共に左心室造影を行ってみると冠動脈造影は正常であるにもかかわらず、左心室壁の動きが局所的に悪い例のあることに気付いた。そこで、東京女子医大第二病院小児科で選択的冠動脈造影検査を行った例の左心室壁運動について検討した。

#### 〔対象〕

年令2才5ヶ月から11才11ヶ月までの男児37例、女児13例の50例である。冠動脈瘤後遺症を残している者は15例、残り35例は冠動脈造影は正常であった。方法は regional area ejection fraction 法(山添ら)を用いた。

#### 〔研究結果〕

冠動脈瘤が見られた15例中8例、53%に冠動脈正常例でも35例中8例、23%に左心室壁の収縮の悪い所が存在していた。全体でみると50例中16例、22%という頻度になり、冠動脈瘤後遺症の10~20%とはほぼ同じか、やや多い頻度に存在することが判明した。

#### 〔考按〕

本研究で見い出された、新しい後遺症である左心室壁運動異常は臨床的には重大な意味がある。その第1はこのような後遺症を残した児の長期予後が問題となる。現時点では明らかではないが、心筋症として発展する可能性があり、左心室壁運動異常を残した児は当然のこと、川崎病罹患児の長期フォローアップの必要性がより一層



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



最近断層心エコー法によって冠動脈瘤病変を高率に診断できるようになったが、川崎病心後遺症として問題となる冠動脈の狭窄性病変の断層心エコー診断はまだ十分とはいえない。このため私どもは冠動脈の狭窄性病変を断層心エコー法でどの程度診断できるかを検討してみた。

対象は断層心エコー検査を受けた川崎病患児で、冠動脈造影検査の結果冠動脈狭窄所見の得られた15名を対象とした。また、3ヶ月から2才までの正常児30名を正常コントロールとした。